

新城の偉人－佐喜眞興英－

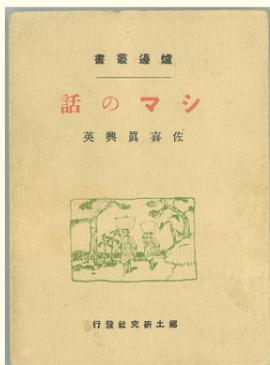


佐喜眞興英は1893(明治26)年11月4日に宜野湾間切新城村の新首里畑(屋号)の長男として誕生し、幼少期に佐喜眞家本家首里畑(屋号)の養子になりました。首里畑は牛馬を数

頭飼ひ、イリチー(住み込み)や日雇いが数人いる宜野湾間切きってのエーキー(豪農)でした。

興英は体が弱く医者薬が欠かせず、三度の食事はウナギのかば焼きだったそうです。教育熱心な養父母と本人の勉学意欲のもと、県立第一中学校を主席で卒業しました。在学中は友人と英語でのみ会話したり、英和辞典の覚えたページは噛み捨てたりしたそうです。東京第一高等学校へトップで入学、東京帝国大学法学部に進み、卒業後は司法官補・判事として福岡や宮崎、岡山県津市の裁判所に勤務しながら民俗・民族学の研究を行いました。

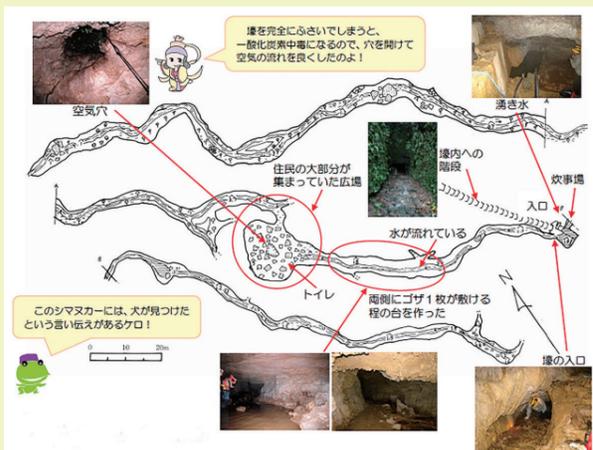
沖縄本島中部を中心に採集した民間説話集である『南島説話』や新城の民俗史である『シマの話』などの著書を出版しましたが、1925(大正14)年肺結核のため31歳で亡くなりました。その翌年に出版された『女人政治考』では古代社会は男性の暴力による支配ではなく、女性の霊力によって治められていたと説き、平塚雷鳥や市川房江などの婦人運動家達は士気を上げ青鞥社を設立。戦後、婦人参政権を勝ち取る契機となりました。有名な「女性は太陽である」という言葉は『女人政治考』に記述されています。



救われた命

1944(昭和19)年頃には新城の民家にも日本軍が駐屯しました。1945年3月末、ほとんどの住民が避難したシマヌカーは、入口の狭さに反して中は広く水量が豊かでした。避難時は村の役員が協議して共同生活を行いました。米兵に見つかった時に「竹槍で戦おう。」と意気込む者もいましたが、米国生活の長い宮城蒲上(屋号：蒲上上仲村渠)さんと宮城オトミ(屋号：前蔵根)さんが当時の見聞から「米軍は民間人を殺さない。」などと人々を説得し、一方で米軍とは命だけは助けるよう交渉して、多くの人々の命を救いました。

その後、蒲上さんは「野嵩収容所」において民間人を管理する「首長」に任命された事が米軍側の活動報告書に記載されています。米軍の通訳を務めながら廃材や発電機を調達し、1947年の「帰村アシビ」を成功させた功労者の一人です。



シマヌカー平面図と洞窟内のようす

編集・発行/宜野湾市教育委員会
〒901-2203 沖縄県宜野湾市野高1-1-2
TEL 098 - 893 - 4430

編集協力/株式会社文化財サービス
〒901-2222 沖縄県宜野湾市喜友名1-11-15-206

印刷/●●●●●●●●
〒〇〇〇-〇〇〇〇 沖縄県〇〇〇〇〇〇



新城

あぐすく

歴史文化遺産マップ



新城について

新城は方音でアラグスクと呼ばれ、宜野湾市の北側に位置する南北に細長い集落です。南側の石灰岩台地にはガマが多く、北側の低地には湧泉が多いという特徴があります。

北側の下原泉周辺に暮らしした七世帯が始まりと言われ、後に南東側の新城原で宜野湾並松沿いに基盤目状に区画された集落を形成しました。サトウキビやサツマイモ栽培を中心とした農業は耕作面積が広く海外移民も多かったため、宜野湾村内でも比較的裕福な集落で赤瓦屋も多くありました。ムラアシビも盛んで6年に1度のマールアシビには村内外から多くの見物客が訪れました。

沖縄戦中に集落全体を米軍に接収され、1947・48(昭和22・23)年頃、野嵩の西側、軍道5号線(現在の国道330号)沿いに「新城小」という集落を作りました。1960(昭和35)年に大砲部隊が解放され区画整理を行い、普天間と喜友名の土地の一部を加えて現在の新城区の範囲になりました。1964(昭和39)年、新行政区設置により新城区となりました。



戦前の新城集落イメージ図

宜野湾市全域図

